

〔平成二一年度哲学会春季大会 研究発表要旨〕

カント倫理学における幸福概念について

徳田尚之

(本学大学院文学研究科 博士課程後期課程)

本発表は、カントの『人倫の形而上学の基礎づけ』（『基礎づけ』と略す）における幸福概念についてひとつの考察を試みる。カントは『実践理性批判』で「道徳は本来、われわれがいかにして自身を幸福にするかということの教説ではなく、われわれがいかにして幸福に値するようになるべきかということの教説である」（Ⅴ 136）と主張する。どのように幸福を手にいれるかではなく、どうすれば幸福に値するかが問われているのである。ところが、われわれがいかに「幸福に値するように」行為したところで、実際に幸福になれるとはかぎらない。カントは有徳な人が幸福でもって報われる理想的状況つまり徳福一致を最高善と呼び、その産出と促進は人間の義務であるとした（Ⅴ 129）。人間は有限な存在であるので、この世界では有徳な行為が幸福で報われることはきわめてむずかしく、ほとんど不可能である。しかるに徳福一致はあくまで「そうあるべき」であり、達成されねばならないものである。このように考え

ると、カント倫理学において幸福という概念をどのようにあつかえばよいかは、十分に検討してみなくてはならない。そこで、「幸福」という語が実際に『基礎づけ』でどのように用いられているかを確認し、それにもとづき幸福の定義、および役割がそれぞれどのようなものであるのかを検討する。

カントの幸福概念

カントは幸福 *Glückseligkeit* をさまざまに言葉で表現している。すべての著作を通じて一貫したただひとつの「幸福の定義」なるものを与えているわけではない。『基礎づけ』ではどのように説明されているか、具体的にいくつか列挙してみよう。

- 幸福という名で呼ばれる、まったくの無事息災と自身の状態に対する満足 (IV 393)
- 理性と意志をもつ存在における自身の保存、安寧、一言で言えば幸福 (IV 395)
- すべての傾向性の充足の総計を幸福という名で呼ぶ (IV 399)
- 自分の必需や傾向性が全部充足していることを一まとめにして、幸福という名で呼んでいる (IV 405)
- 幸福は理性の理想ではなく想像力の理想であり、単なる経験的な基礎にもとづくものである (IV 418)
- どのような行為が理性的存在者の幸福を促進するのか、ということを確認にまた普遍的に決定するという課題は、全くもって解決不可能 (IV 418)

このようにカントはさまざまな仕方です幸福という語を言いかえるが、なかでも注目するべきは「すべての傾向性の充足の総計」や「自分の必需や傾向性が全部充足していること」という部分に見られる「傾向性（の充足）」という表現である。これは『基礎づけ』以外の著作においてもしばしば見られる表現である。傾向性とは「欲求能力が感覚に依存していること」（IV 413 Ann.）である。感覚に依存した欲求能力が満たされているということは、自分のしたいことが思いどおりにできる状態のことである。これがカントが考えていた「幸福」の基本的なイメージと言つてよい。経験的で主観的な諸々の感覚にもとづいた欲求が持続的に満たされている状態のことを、カントは幸福と呼ぶのである。

またカントは、幸福概念のあいまいさを強調する。カントによれば、理念としての幸福にとつては、すなわち一生のあらゆる状態を通して幸福であるためには「ある絶対的な全体が、すなわち私の現在およびあらゆる将来の状態における無事息災の最大量」（IV 418）が必要である。あるひとが現在および未来のあらゆる状態においてどのような傾向性を持ち、かつどうすればそれを最大限に充足できるかを確実に知つてることが、要求されるのである。有限な存在者である人間には、このようなことはとても不可能である。幸福は人間ならみな求めるものであるにもかかわらず、その内実はきわめてあいまいなものであり、何が自分にとって本当に幸福なのか、どうすれば幸福になれるのかは、はつきりとはわからないのである。

幸福の役割

さてこのようにあいまいでしかない幸福は、道徳においてどういう役割を果し、また果さないのだろうか。はじめに注意しておくべきなのは、カント倫理学では命法（義務）の概念がまず根底にあり、そこに幸福がどう関わっているかが問題となるということである。人間には、理性が意志に影響を与える実践的能力としてそなわっている。しかし、たんに幸福をめざすだけなら、理性でなく本能にしたがうほうがうまくいくだろう。人間に理性がわざわざ与えられたのは、それを用いて幸福になるためではなく、より高次なもの（善意志）をめざすためにちがいない。とはいえ、人間はつねに道徳法則にしたがって理性的・道徳的に行為できるわけではなく、衝動や傾向性に流されてしまうことがある。それゆえ、道徳法則は、理性が意志に対し命令するかたち、つまり命法として、しかも無条件にしたがうことを要求する定言命法として、あらわれるのである。

それではここに幸福はどのように関わっているのか。以下に幸福の役割について、四つの点をあげて述べる。

(1) 幸福は道徳の究極目的や原理ではない。幸福は傾向性の充足といえるが、上で述べたように、一生を通じて幸福であることは有限な人間にはとうてい不可能である。人間は「幸福になろうとしても、確定した原理に従って行為すること」(IV 418) はできないので、唯一の原理ではなく、その場その場の状況に応じた経験と推測にもとづいて行為するしかない。それゆえ「幸福を追求せよ」という命令は定言的な命法にはなりえず、せいぜい「これこれの条件のもとではこうせよ」という経験的な忠告でしかないのである。

(2) 幸福は人間の自然的目的である。すべての人間は、幸福になろうとする意図をもつことができるし、実際にもっている。傾向性（感覚に依存した欲求能力）をひとまとめにしたものが幸福だと定義されるのだから、幸福に対するきわめて強い傾向性をもととそなわっているのは当然のことである。「すべての人間が有している自然目的は、自分自身の幸福」(IV 430) なのである。わざわざ「幸福を追求せよ」と命令されずとも、人間は幸福になろうとい

う意図を自然的必然性によつてもつてゐる。ゆえに幸福への意図は人間にとつて本質的なものだと言えるだろう。

(3) 幸福は道徳的目的のための手段である。もしひとが幸福でないなら、まずは幸福になろうとするだろう。そしてそれに気をとられるあまり、諸々の道徳的義務を遵守できなくなるかもしれない。それゆえ幸福になることは、義務違反への誘惑をふせぐための「間接的な義務」(IV 399)と言える。もちろん人間には幸福への本質的な傾向性があるので、わざわざ命令されずとも幸福を追求しようとする。しかし、たとえ幸福への傾向性がなくなつたとしても、自己の幸福を確保せよという義務は依然として残つてゐる。幸福になりたいという意図がまつたく失なわれてもなお幸福になるために行ふすること(義務に従うこと)にこそ、道徳的価値がある(IV 399)。幸福は人間にとつて自然的目的であるが、道徳的目的それ自体ではない。道徳に対しては、幸福は目的ではなく手段として関係するのである。

(4) 幸福は道徳的目的の一部である。道徳の究極目的は最高善の達成である。最高善とは、道徳性と幸福とが結合したものであり、その産出と促進はわれわれの義務である。その意味で幸福は道徳的目的に組み込まれてゐると言えよう。『基礎づけ』では最高善についてはあまり述べられていないが、しかしカントの幸福概念を考察するうえで最高善を無視することはできない。それでは、なぜ幸福に関する考察で最高善のあつかひが必要となるのだろうか。ここで『実践理性批判』をもとに、最高善について少しく検討する。

最高善はどのようにして可能となるのか、また人間の力で実現できるものなのか。人間が行ふるとき、その意志を決定するものはあくまで幸福ではなく道徳法則でなくてはならない。最高善が実現されるのは、道徳法則にしたがつた行為に依じて幸福がもたらされるときである。道徳性に比例して幸福が配分されるとき最高善が成り立つのである(IV 410)。ところが、有徳な人が必ずしも幸福であるとはかぎらないし、幸福を求めることが有徳なふるまいか

どうかもわれわれにはわからない。人間は理性的存在者であると同時に感性的存在者でもある。つまり人間は道徳法則だけでなく自然法則にもまた支配されるので、いかに道徳法則を遵守しようとしても感性的な部分がそれをさまたげてしまう（V 122）。しかし、「魂の不死」という前提を要請することにより、道徳法則との完全なる一致に対して無限に近づいていくことができる。ある理性的存在者の存在と人格性が無限に持続すると想定すれば、その無限の進行において、完全なる一致に至ることができるのである（V 122）。くわえて、その完全なる一致に至ったとき、それに応じた幸福が可能となつてはならない。なぜなら、有徳な行為とはつまり幸福に値する行為だから、幸福に値しているにもかかわらず幸福に与つていないことはありえないからである。有限な存在者たる人間ではこれを実現することは不可能である。そこで、道徳的な完全性に対しふさわしい幸福を分配する力能をもつ、「神」の存在が要請されるのである（V 124）。この「魂の不死」と「神」の要請により、最高善ははじめて可能となるのである。有限な存在者である人間が、最高善を達成可能なものとして認識するためには、これらはどうしてもなくてはならないものであり、要請せざるをえない。最高善の達成をめざすとき、人間は傾向性に支配されやすい意思をもつ有限な存在者であるにもかかわらず、その制約の支配から逃れることができるのである。

結び

幸福は人間にとつて必然的で強力な傾向性であり、誰しも幸福を求めずにはいられない。しかしたんに幸福を追求するだけなら理性的存在でなくともできることである。幸福の追求という本質的な欲求を、理性で統制し、秩序づけ

することこそが、人間の理性的存在たる所以である。すなわち、幸福をあえて目指さないといい姿勢をとれるところに、人間の崇高さがあらわれているのである。カントの「幸福に値するよう行為せよ」という表現は、きわめて豊かな内実をもっている。われわれは幸福を正当に望むことはできないかもしれないが、それでもそうであるように行うべきではない。それが「魂の不死」と「神」の要請へとつながっていく。幸福に値するよう行為することを通じて、感性的存在者でもある人間はその制約の克服へと無限に近づいてゆくのである。そうしたことがどのようになぜ可能なかを知るためには、他の著作とくに『実践理性批判』を詳しく読み解いていかねばならない。